信濃國筑摩温泉

泉タリ、猶其河水ニ近キ所ハ、甚熱湯也、然レドモ其河水ニ於テハ、曾テ温湯ノ氣味ナシ、又此地ニ温泉藥師ト稱スル靈像アリ、口碑ニ傳フル處、文永年中、温泉此地ニ涌出セシトキ、湯ノ島ノ樹下ニ於テ光アリ、村民アヤシミ、其光明ヲタヅヲ行テ見ルニ、藥師ノ尊像ヲ得タリ、故ニ一宇ノ艸堂ニ安置シテ、温泉藥師ト稱セリ、然ルニ寛文年中、同郡萩原郷中呂村龍澤山禪昌禪寺第八世、剛山祖金和尚、此地ニ於テ一寺ヲ建立シテ、彼靈佛ヲ安置ス、醫王山温泉禪寺ト稱セリ、　羅山林先生詩集卷第三曰、紀行三、西南行日錄元和辛酉孟夏二十五日之條下、有馬山温湯、　温泉濃沸石磐間、病可除兮垢可删、這裏提醒長水子、本然清淨忽生山、　我國諸州多有湯泉、其最著者、攝津之有馬、下野之草津、飛驒之湯島、是三處也、下略　今有馬、草津ハ、廣ク世ノ知ル所也、湯島ハ、古來ノ靈湯タルコト、遠ク知ルモノ少シト云ヘドモ、入湯スル人ハ、其驗ヲ得ザルコト無シトナリ、

〔類聚名物考地理三十五〕つかまのゆ　筑摩湯　信濃筑摩郡

〔後拾遺和歌集十八雜〕修理大夫惟正、信濃守に侍りける時、ともにまかり下りて、つかまの湯をみ侍りて、

源重之

出づる湯のわくに懸れる白糸はくる人絶ぬ物にぞ有ける

〔夫木和歌抄二十六温泉〕百首歌戀　つかまのみゆ　信濃

段富門院大輔

わきかへりもえてぞ思ふうき人はつかまのみゆかふじのけぶりか

〔宇治拾遺物語六〕今はむかし、信濃國につくまの湯といふところに、よろづのひとのあみけるくすりゆあり、そのわたりなる人の夢にみるやう、あすのむまのときに、觀音湯あみ給ふべしといふ、いかやうにてかおはしまさんずるとふに、いらふるやう、とし卅ばかりのおとこのひげくろきが、あやい笠きて、ふしぐろなるやなぐひ、皮まきたるゆみもちて、こんのあをきたるが、夏げのむかばきはきて、あしげの馬にのりてなんくべき、それを觀音と云りたてまつるべしといふ